県内酪農家の搾乳手技の実態とバルク乳体細胞数の関係

乳房炎防除策の一つとして乳房内にできるだけ菌を入れない搾乳手技が求められる。県内酪農家の搾乳手技の実態を調査し、乳房炎発生リスクの指標となるバルク乳体細胞数（以下SCC）との関係を分析した結果、搾乳手技の実施率に差があり、「殺菌剤等使用の有無」、「ポストディッピング実施の有無」等の項目で農家のSCCに差が見られた。

内　容

乳房炎は、原因菌が乳頭口から乳房内に侵入し、乳腺（せん）組織に炎症を起こす病気である。最近の研究では、ミルカーを装着した乳頭ではミルカーが拍動する度に高い頻度で乳汁の逆流が確認されており、この時に乳房炎感染が起こる。搾乳手技、とりわけ搾乳前の乳頭の汚れを取り除く乳頭清拭（せいしき）の良否が、乳房炎防除のポイントとされている。そこで、県内酪農家の搾乳手技の実態を以下の方法で調査し、SCCとの関係を分析した。

調査対象：2010年度に、家畜保健衛生所の協力を得て農家で聞き取り調査した。調査戸数は合計387戸（播州79戸、阪神66戸、但丹45戸、淡路197戸）で、搾乳形態別ではパーラー搾乳30戸、パイプライン搾乳306戸、バケット搾乳51戸であった。

調査項目：盧乳頭清拭時の使用消毒剤及びゴム手袋着用の有無、盪乳頭清拭方法(プレディッピング、前搾り、ポストディッピング等の有無と手順）とした。なお、各農家のSCCは、2010年４月～12月の平均値を用いた。

各搾乳手技の実施率をみると、搾乳時のゴム手袋着用率は、パーラー搾乳やパイプライン搾乳では高いが、バケット搾乳では低かった。プレディッピングは、パーラー搾乳では45％が実施していたが、パイプライン搾乳やバケット搾乳では実施率が低かった。一方、前搾りやポストディッピングは、全ての搾乳形態においてそれぞれ80％以上、90％以上と実施率が高かった（図１）。

パイプライン搾乳では搾乳手技の違いにより、SCCに差がみられた。すなわち、清拭時の消毒剤や清拭用洗剤の使用、及びポストディッピングの実施農家は有意にSCCが低かった。一方、パーラー搾乳及びバケット搾乳では有意差はなかった（図２）。

今後の方針

乳頭清拭により乳頭口の除菌効果を高めることが乳房炎予防には重要である。今後は細菌検査を含めた搾乳手技の比較試験を実施し、乳頭口の除菌効果が高い効果的な搾乳手技を検討する。

山口　悦司（淡路　畜産部）
（問い合わせ先　電話：0799 - 42 - 4880）

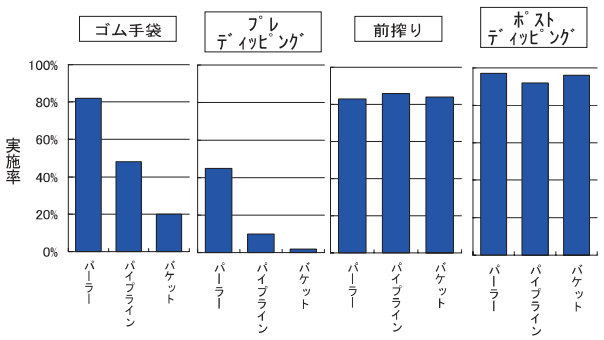

図１　各搾乳手抜の実施率（搾乳形態別）

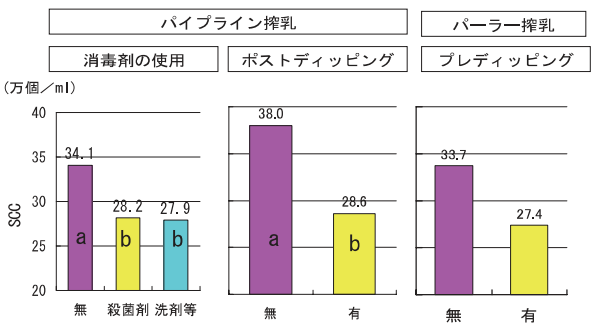

図２　各搾乳形態における搾乳手抜とのSCCの関係

異符合間に有意差